

□ Wardle P. : *Vegetation of New Zealand* 672pp. 1991. Cambridge University Press, Cambridge. 約¥38,000.

国土面積が約27万km<sup>2</sup>と日本や英国のそれに近いニュージーランドは、南緯33°から53°を占め、緯度では日本よりも極側に寄るため、南島では大規模な氷河が発達している。山の標高（最も高いMt. Cookは3,764m）や火山、脊梁山地の存在による気候の地域差など、環境面でも日本と比較できる点が多い。日本が南北に長く環境も複雑で植生が多様であるのと同様に多様さがここにも存在する。ニュージーランドは日本からは遠い国だが、日本と全く別な植物区系に属する異質な植物相が植生上どのような違いを生むのか、評者は興味深く思った。

本書は直訳すれば「ニュージーランドの植生」だが、単なる植生記載ではなく、植物の生きざまについてのモノグラフといった方が内容を適切に表現している。全体は、1) 自然ならび生物的環境；2) 植物相と植生の起源と変遷史；3) 生育地と生活形；4) 繁殖法、芽ばえ、寿命；5) 植生の記載・命名・分類、および環境と生態的諸過程；6) 植物区；7) 森林；8) 低木（ブッシュ）、ヒース、低木林およびシダ地；9) 草地；10) 湿地植生；11) 土壌が未発達な地面と消失した土地の疎生あるいはパッチ状植生；12) 高山帯；13) 属島（の植物相と植生）；14) バイオマス、生長、栄養、耐性；15) 遷移、退行遷移、侵入；16) 自然林の破壊・更新・動向、の16章からなる。各章ごとに挿入された総計300を超す写真と図表が記述の理解を助ける。多くの図表は他地域でも同様に作成されたものが多く、比較に便利である。

著者 Peter Wardle は、ニュージーランドでは最大級の生物系研究機関がある、Department of Science and Industrial Research の Land Resources Division に席を置く研究者である。1970年代から各地の植生や様々な種の生態について25篇あまりの論文を専門誌に発表している。

本書を通読した印象を2つほど紹介したい。そのひとつは先に述べた評者の期待に関係するのだが、系統を異にする植物が景観の類似した植生を構成する事実と異系統植物によるみごとな生態的

適応形態が並行的に存在することへの驚きである。ゴマノハグサ科は北半球でも多様化した科といえるが、ニュージーランドではクッション植物ともなっている。日本やヒマラヤならヒダカミネヤナギなどヤナギ科の匍匐性矮性低木が生えるところにスマレ科やトベラ科の匍匐性矮性低木が見られる。群落組成表をみると日本でも馴染みの属が数多く登場する。高山帯ではグローバルな分布をする属が多いのは既知のことだが、組成表として提供されてみると理解はさらに深まる。

他の印象は、本書が対象を自然植生に限っていることへの疑問である。よく知られているようにニュージーランドに入植した英国人は本国と似たこの地を本国から移入した植物や動物をもって本国にいる気分になろうとした。日本並みとはいえず島であり、近接のオーストラリアからは1,600kmも離れている。こうして移入された動植物が時に不調和な生態系を生み、本来の自然に多大な影響を及ぼしたことはいうまでもない。現にニュージーランドを訪れた人は、いたるところで流れに沿って茂るヤナギ、山の斜面に広がるハンノキ属植物など数多くのヨーロッパ産植物に出会うであろう。ニュージーランドは世界有数の農業国であり、畑や牧羊や牧牛のための草地が大面積を占める。ここでも北半球で馴染みの種は多い。こうした植物がつくる植生について、本書で何も語られていないのは片手落ちである。日本でも「日本の植生」なる本を編むとすれば、自然植生だけに限定しようとする見解も当然あるし、現にこの視点で編まれた著作もある。ニュージーランドは自然植生が比較的よく保たれ、日本のように自然植生が痕跡的に残っているに過ぎないわけではないが、それでも現実を直視する必要はいずれでも変わりがないと評者は考えるのだが。 (大場秀章)

□ Lyte C. : *Frank Kingdon-Ward : The last of the great plant hunters* 218 pp. 1989. John Murray Ltd., London.

著者の Charles Lyte は長らくジャーナリストとして活躍してきたが、1980年にロンドンの David & Charles から Sir Joseph Banks を出版以来、自然史関係、園芸関係の著述に健筆をふるっ

ている。

本書がその生涯を伝える Kingdon-Ward は副題にもあるように 1885 年生れの最後の偉大な植物採集家である。その来し方をほぼ年代順に概説したのが本書である。中国西南部、チベット、ヒマラヤ植物に K-W が刻した足跡は大きく、その標本は多くの研究者を助けてきた。むろん K-W の目的は、研究者のためにおしば標本を作ることだけにあったわけではない。他の多くの植物採集家同様に園芸に役立つ新しい野性種や野生株の種子を得ることが主たる目的といつてよい。

ただ K-W は Forrest や Cooper と一味違っていた。種子採取と標本作りに専心するだけでなく、地理や地質にも多大の関心を抱き続け、さらに K-W の探索の多くは紀行文として出版している。その紀行文は克明であり、K-W の広い視野と興味に支えられている。

本書はこうした幅広い K-W の生涯を限られたスペースの中で要領よくまとめている。著者の両親は戦前からの K-W の旧知で、著者自身子供の頃から K-W のことを聞き育ったと前書きに記されている。特別な思い入れをときに感じる。特に K-W の未亡人 Jean Rasmussen に対しては特別な配慮を感じる。本書は K-W の身内とはいわなないまでも、かなり近い立場から、他者では入手できぬ情報も折り混ぜ書かれた伝記といえる。

*Caltha calustris* (→ *palustris*) とか *Rhododendron cawdorensis* (→ *cawdorensense*) といった不注意なミスが散見される。(大場秀章)

□牧野植物同好会：Makino 80『植物同好会』八十年の歩み 314pp. 1992. 非売品。

牧野富太郎博士が1911年に始められた東京植物同好会は、博士の指導の下にアマチュアも専門家も含めた歴史の古い会だったが、太平洋戦争と続く敗戦による社会情勢の激変で休会となった。

1965年博士の希望もあって、高齢の博士にかわって久内清孝博士をはじめとする有志により「牧野植物同好会」として復活された。以来、川村カウ氏を世話人として、会報「Makino」の刊行をはじめ、頻りに観察会、研究会を行いながら今日に至っている。本書は東京植物同好会発足80周年を記念するものである。140頁までは、同好会の歴史を物語る写真、資料、回顧談で、牧野博士をはじめとする先達のエピソードや同好会活動の思い出が綴られている。後半は Makino に連載された伊藤洋（決め手と手がかり）、林弥栄（珍しい木）、深津正（植物和名の語源）、許田倉園（イネ科の話）、長谷川義人（植物雑記）の五氏の報文をまとめたもので、内容の豊富な読物となっている。この後半は「植物遊訪『Makino』論文集」として分冊にもなっている。入手には牧野植物同好会（〒156 東京都世田谷区 川村カウ氏方）へ問い合わせられたい。(金井弘夫)

□池上義信（監）、石沢進（編）：新潟県植物分布図集第1～10集登載植物および索引 146pp. 1990. 植物同好じねんじょ会。¥2,000.

これまで刊行された分布図所載の植物の分類順、学名順、和名順索引である。付録としてユキツバキ、ヤブツバキ、中間型の詳細な分布図と資料リストがある。これと平行して分布図集第11集（¥3,000）も刊行された。これには25種類（コケを含む）の分布図が収録されている。じねんじょ会の分布図は10巻までに1,000余種におよび、図版の出来のよさとともに植物分布図のお手本のようなものである。強力な指導者と辛抱強い会員の努力のほかに印刷出版社のよき理解があったときいであるが、分布図とともにこれを利用した種々の研究が発展することを期待する。(金井弘夫)

#### 正誤 Errata

巻 (Vol.)	号 (No.)	頁 (page)	行 (line)	誤 (For)	正 (Read)
66	5	308	↑17L	自宅	病院
66	5	310	↓10L	すゑ	ちゑ